

父親役割意識と父親の育児行動の 一致・不一致が精神的健康に 与える影響

黒 澤 泰^{1,*}

Congruence between Beliefs on the Role of Fatherhood and Fathering Behavior: Its Relationship with Subjective Well-being

Tai KUROSAWA

The present study had two objectives. The first was to develop a measure of beliefs on the role of fatherhood (BRF), focusing especially on beliefs regarding what functions fatherhood should have. The second was to investigate how those beliefs and fathering behavior affect father's well-being. A questionnaire survey was conducted in 2007 with 93 fathers participating, and results suggested that BRF consists of the factors: working, disciplining, and nurturing. Furthermore, BRF and fathering behaviors had a positive correlation with subjective well-being. In addition, hours of labor had a negative correlation with subjective well-being.

key words: beliefs on the role of fatherhood, fathering behavior, subjective well-being

問 題

幼児虐待が深刻な社会問題となり、子育て支援が高らかに唱えられている現在、「親」の心理に着目した研究の必要性は増大している。父親を対象とした、Baruch & Barnett (1986)の研究では「親役割」を高く認識しているほどたくさんの育児行動を行い、そのことが父親としての有能感につながるという結果が出ている。

本研究の目的 しかし、先行研究では「父親役割」というものの「構造」の側面が定義・区別されていないため、父親観によって回答が変わることが予測される。本研究では、その点をふまえ、父親役割意識を「自分の現状・状況とは関係なく、「父親」がどういう役割・役目であるべきと考えること」と定義する。

仮説

研究 1: Matta & Martin (2007)の研究により、父性の

3側面は、しつけ (Moral Leader)・家計維持 (Economic Provider)・養育 (The Nurturing Father) であると説明されている。この3側面が、日本の父親にも当てはまるであろう。

研究 2: 父親の役割意識と行動の一致が高い精神的健康、不一致が低い精神的健康につながるであろう。

方 法

調査対象 現在0歳から6歳の未就学児の子どもを持つ父親93名から結果を得た。

調査協力者の平均年齢は35.3歳 ($SD=4.8$)であり、子どもの平均年齢は、3.4歳 ($SD=1.71$)であった。

配布・回収方法 2007年12月、神奈川県内の保育園や育児支援グループを通じて質問紙を配布した。研究1、研究2ともに、同じサンプルを用いた。回収率は、31.7%であった。

フェイスシート 週間の平均労働時間、配偶者の勤務形態等も尋ねた。

研究 1 (尺度作成)

目的 父親の役割・役割として、しつけ、家計維持、養育の3側面を反映する尺度を作成することである。

項目作成方法 2007年7月中旬に0歳から5歳の子どもをもつ有職の父親6名 (平均年齢34.2歳, $SD=7.5$)を対象に、インタビュー調査を行った。職種は、会社員5名、研究職1名であった。その内容を元に、Matta & Martin (2007)の概念を参考にし、心理学を専攻とする研究者1名とともに添削し、18項目作成した。5件法である。

結果 天井効果・フロア効果を示した項目を削除した後、3因子指定、主因子法、プロマックス回転で因子分析を行い、負荷量が.40に満たない項目を削除した。同条件で、回転後、残った11項目を父親役割意識尺度として使用した。因子名をそれぞれ、「稼ぐ父親観 ($\alpha=.72$)」「しつける父親観 ($\alpha=.86$)」「養育する父親観 ($\alpha=.60$)」と名づけた。因子分析結果を表1に示す。全体の α は11項目 ($M=3.26$, $SD=.44$)で.76であった。下位因子の中で「“養育”という役割観」のみが、育児行動と有意な正の相関を示した ($r=.48$, $p<.001$)。また、「しつけ」と「稼ぐ」という役割観は、有意な中程度の正の相関 ($r=.42$, $p<.001$)を示した。「しつけ」と「養育」($r=.05$, $n.s.$)、「稼ぐ」と「養育」($r=-.01$, $n.s.$)の間には有意な関係は見られなかった。

考察 仮説1は支持された。「養育」と育児行動の関係は、親意識の高さと養育行動の頻度の関係を述べた

¹ 本研究は、2008年度国際基督教大学卒業論文として提出したものを加筆・修正したものである。本論文の執筆に関して、指導を頂いた同大学の、小谷英文教授、河崎一郎氏、佐柳信男氏をはじめとする多くの方々に感謝いたします。

* 東北大学大学院教育学研究科

Graduate School of Education, Tohoku University

Table 1. 父親役割意識尺度の因子分析結果 (N=93)

項 目	M	SD	Factor Loading		
			1	2	3
WF 1. 家族を経済的に養うことが父親の役目である	3.91	0.90	0.90	-0.06	0.08
WF 2. 父親の役目は家族のために稼ぐことだ	3.53	0.95	0.83	-0.09	0.15
WF 3. 父親の役目は家計を支えることである	3.53	1.00	0.59	-0.09	-0.17
WF 4. 父親の稼ぎは家族のためにある	3.94	0.79	0.42	0.25	-0.24
WF 5. 子どもの価値形成のために、父親が手本を示すべきだ	3.80	0.79	0.42	0.25	-0.24
DF 1. 子どものしつけは父親の仕事である	3.16	0.86	-0.13	0.93	0.06
DF 2. 子どもがルールを守るように教えるのは父親の役割である	3.30	0.92	-0.08	0.90	0.09
DF 3. 父親の役目は子どもに善悪を教えることである	3.44	0.90	0.20	0.66	-0.05
NF 1. 母親や祖父母などがしっかりやれば、 父親は必ずしも子育てに参加しなくて良い (逆転項目)	1.86	0.77	0.03	-0.02	0.93
NF 2. 父親が育児に参加しないことはそこまで重要ではない (逆転項目)	1.89	0.80	0.04	0.06	0.50
NF 3. 父親が育児をしないことは、父親として失格だと思う	3.45	1.07	0.08	-0.08	-0.45
固有値			3.82	1.96	1.53
分散率			94.75	17.84	13.93

Note. WF=The Working Father, DF=The Disciplining Father, NF=The Nurturing Father, Boldface indicate highest loadings.

Baruch & Barnett (1986) の研究を支持する形であり、尺度の構成概念妥当性が考えられる。

研究 2 (仮説検討)

目的 父親役割意識と育児行動の一致・不一致と父親の精神的健康度の関係性を調べることである。

使用尺度 ①研究 1 で作成した父親役割意識尺度。②森下 (2006) の作成した親の育児行動尺度。③父親の精神的健康を測る尺度として、伊藤・相良・池田・川浦 (2003) が作成した主観的幸福感尺度を使用した。本研究では、「至福感」領域を除いた 12 項目を使用した。

分析方法 2 (父親役割意識高・低) × 2 (育児行動高・低) の 2 元配置の分散分析を行った。分布から判断し前者を中央値で、後者を平均値で、分けた。前者と後者が一致しているもの (高・高)、(低・低) は主観的幸福感が高く、不一致なもの (高・低)、(低・高) は低いと仮説立てた。

結果 独立変数の交互作用は有意でなかったが ($F(1, 82) = 1.30, n.s.$)、父親役割意識と ($F(1, 82) = 5.50, p < .05$)、育児行動は ($F(1, 82) = 5.09, p < .05$) とともに主効果がみられ、5% 水準で有意な差が示された。相関関係では、主観的幸福感と労働時間と、有意な弱い負の相関 ($r = -.25, p < .05$) を示した。また、労働時間を制御変数としたとき、偏相関関係で主観的幸福感と、父親役割意識尺度全体 ($r = .25, p < .05$)、"しつけ" ($r = .30, p < .01$)、育児行動 ($r = .27, p < .05$) と弱い正の相関、"養育" ($r = .51, p < .001$) と有意な中程度の正の関係を示した。主観的幸福感の値は、(父親役割意識・育児行動)：(高・高) $M = 3.17$ ($SD = 0.36$)、(低・高) $M = 3.09$ ($SD = 0.24$)、(高・低) $M = 3.09$ ($SD = 0.34$)、(低・低) $M = 2.85$ ($SD = 0.34$) であった。

考察 仮説 2 は不支持であった。父親役割意識の高さ、育児行動の多さと主観的幸福感の高さの関係性が示された。

総合考察

本研究の結果、父親の育児行動と主観的幸福感の高さに関連が見られた。また、子どもと関われない・関わらない父親でも、父親としての役割を強く意識すること、特に養育・しつけの役割の認識と主観的幸福感の高さに関連が見られた。このことは、父親が育児しやすい環境づくり、育児参加の啓発活動の必要性を裏付ける結果ではないかと考える。さらに、父親の労働時間と精神的健康の間の関係は、長時間労働は精神的健康を低下させる可能性を示唆するものである。この視点は、労働の質的負荷 (例えば、単純派遣労働のように肉体的疲労が多い仕事) とともに、父親のメンタルヘルスを考えるにあたり重要であろう。

引用文献

- Baruch, G. K., & Barnett, R. C. 1986 Consequences of Father's Participation in Family Work: Parents' Role Strain and Well Being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5, 983-992.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 2003 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74(3), 276-281.
- Matta, S. D., & Martin, K. C. 2006 Father Responsivity: Couple Processes and the Coconstruction of Fatherhood. *Family Process*, 45(1), 19-37.
- 森下葉子 2006 父親になることによる発達とそれに関わる要因 発達心理学研究, 17(2), 182-192.

(受稿：2008. 6. 20, 受理：2009. 1. 26)